

《資料紹介》

徳光屋烏犀円の看板と広告

湯川 洋史

1 徳光屋および烏犀円について

徳光屋は現在も熊本市内で営業している卸薬会社である。同店会長（2001年当時）の渡邊一正氏によれば、渡邊家の先祖は細川家の御典医で、寛政9年（1797）細川忠利の肥後入国に従って来熊、その後殿中を離れ、徳光屋をはじめたという。徳光屋中興の祖とも言うべき14代目敬右衛門は弘化元年（1844）に生まれた。22歳で家督を継ぎ、西南戦争後の復興景気に乗り、店は繁昌し、薬以外に医療機械や写真材料、染料や食料品など多様な商品を扱い、全国長者番付にも載るほどの隆盛を誇っていたという。徳光屋の店舗は創業当初から現在の新町一丁目にあり、のち明治43年（1910）に、第151銀行跡地（現新町二丁目）に移転した¹。

14代目敬右衛門時代の店舗の様子が、明治19年（1886）に出版された『熊本商家繁昌図録』²に出ている。これを見ると、初代玄精が創製したと伝わる烏犀円が、徳光屋の看板商品だったことが分かる。様々な病気に効く万能薬とされる烏犀円の処方是中国宋代にまで遡るといふから³、玄精による創製とは言い難いが、後に述べる出土遺物の状況から見ても、当時市内においては徳光屋＝烏犀円という図式が成立していたものと思われる。

この徳光屋の烏犀円はすでに小川望によって紹介されている⁴。そこでは出土遺物を中心に、内藤くすり記念館所蔵の看板⁵なども報告されているが、当館所蔵の看板と広

告については触れられていない。「肥後／渡邊／烏犀円」と銘のある徳光屋烏犀円の磁器製薬合子蓋は、大分県・長崎県・佐賀県・福岡県・山口県・広島県・東京都と九州圏を中心に広く出土している遺物と言える⁶。こうした出土状況は明治時代の商品流通を考える上で興味深い。だが、一方で熊本市内における徳光屋烏犀円の販売・流通の形態や方法についてはこれまで論じられたことがない。現状、その任に私は応えられないが、今後そうした課題を考えていく上でも資料の発見と公表が必要となるだろう。そうした点から、まず当館所蔵の資料を世に出す必要があると考え、本稿を執筆した。

2 烏犀円看板と広告について

（1）看板

当館所蔵の烏犀円看板は写真-1の通りである。木製板状で上部に吊り金具、両側面に取手が付く。どちらも鉄製である。板材については分からない。上部に吊り具があり、使用痕もあることから、縦に吊って使用したものと思われる。裏表両面に同一の文言が刻まれている。法量は板部が縦1065ミリ、横355ミリ、厚さ35ミリで、全長は1132ミリ、横453ミリである。刻まれている文言は「登録商標／〔商標〕／和漢洋第一強壯之良材／烏犀円／本舗肥後熊本市新壹丁目／渡邊敬右衛門製（方印〔敬〕）」である。

装飾はほとんどない。唯一、縁に沿って、文字を囲むように幅5ミリの線が彫られている。彩色はほとんど剥げているが、残っているものから判断するに下地は黒、文字は金で、方印の囲み部分のみ朱が見られた。また、商標の牛もしくは犀⁷と、文字を囲むように彫られた飾りの線にも金を確認できた。

商標の植物⁸のみ緑に塗られていた。彩色の原料は現時点で不明である。

地番が新一丁目とあること、登録商標との文言があることから、明治17年から明治43年の間に作成・使用されたものと思われる。



写真 - 1 烏犀円看板

(2) 広告

当館所蔵の烏犀円広告は写真-2の通りである。縦262ミリ、横304ミリの一色摺である。折れと破れがあり、一部文字が失われている箇所がある。だが、内容を理解するには問題ない程度の損傷具合と言える。成立年代は内容から明治時代のものと分かる。新一丁目とあることから看板とほぼ同一時期のものとしてよいだろう。

広告には、烏犀円が徳光屋秘伝のものであること、明治維新以後一般に販売を開始したこと、「中風肝症の妙薬」である烏犀円の薬効などについて書かれている。高橋修の分類に従えば、効能書型の広告と言える⁹。

本資料記載の内容から、徳光屋の烏犀円の具体像を一部知ることが出来る。「壹廻り代七匁五分 半廻り三匁七分五厘」とあることから、容量別で2つのタイプを販売していた。また、「焼物入」とあるから、容器が焼き物だったことが知れる。この容器が出土している磁器製の合子だろう。この2つの情報はすでに小川によって指摘されている。出土遺物から見えた事実を補強する内容と言える。

次に、「和漢煉薬最大一の仙円」とあるから、徳光屋の烏犀円が練薬だったことが分かる。これは出土遺物からは分かっていない点だから、この資料ではじめて確認できた点と言える。

1章で触れたように、徳光屋は現在も熊本市で卸薬業を営まれている。今回は執筆まであまり時間が無く、またあくまでも資料紹介だったから調査しなかったが、渡邊一正氏の記事には、徳光屋敬右衛門が熊本大学薬学部の前身となる私立薬学校の設立にかかわったなど、薬業にとどまらない功績のある人物だったことが記されている¹⁰。その点、熊本市の歴史を知る上で重要な人物と思われるから、機会が許せば調査をおこないたいと考える。

《謝辞》内藤記念くすり博物館 学芸員 稲垣裕美様には、お忙しい中にも関わらず、所蔵資料の確認を快くいただきました。末筆ではありますが、この場を借りて御礼申し上げます。

げます。

¹ 渡邊一正「九州一の老舗に残された歴史の重みと看板」『月刊卸業』25巻8号 2001

² 田中義幸編『明治銅版面 熊本商家繁昌図録覆刻版』青潮社 1984 p.107

³ 小川望 a 「肥後/渡辺/烏犀圓」銘葉盒蓋 - 熊本城本丸御殿跡出土資料を中心に - 『江戸遺跡研究』5号 2018 p.38

⁴ 小川望 b 「烏犀圓」の銘をもつ合子蓋と商標・薬名『江戸時代の名産品と商標』2011 吉川弘文館 pp.169 - 199

⁵ この看板に書かれている住所を小川は「塩屋町」と記し、美濃口雅朗（「第6章 まとめ」『熊本白調査センター報告書 第2集 熊本城跡発掘調査報告書2 - 本丸御殿の調査 - 第2分冊 2016 p.348』もそれをそのまま踏襲しているが、これは「塩屋町」の間違いである。これについては所蔵元である内藤記念くすり博物館学芸員稲垣裕美様にお骨折りいただき、文面をご確認いただいたところ、「塩屋町」と書かれていたことが確認できた。塩屋町は現在の新町2丁目にあつ

るため、渡邊一正氏の記事内容と矛盾しない。なお、小川が参照したのは岩井鑛治郎編『百年前のくすり』内藤記念くすり博物館 1996

⁶ 小川望 a p.52

小川望 b pp.170 - 171

⁷ 小川は「牛のような動物」と評しているが、徳光屋は烏犀円という商品を看板商品として扱っているから、犀の可能性もあるのではないと思われるが、現在確証はない。当館収蔵資料は彩色がほとんど剥げているため、描かれている動物の判断までは出来ない。小川望 b p.187

⁸ この植物について、小川は「稲穂か麦束」とするが、当館所蔵の看板には穂が見られず、着色も緑一色だから、稲穂も麦束も異なると思われる。恐らく薬草だろうが、植物名までは分からない。小川望 b p.187

⁹ 高橋修「引札の様式論的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第222集 2020

¹⁰ 渡邊一正「九州一の老舗に残された歴史の重みと看板」『月刊卸業』25巻8号 2001



写真 - 2 烏犀円広告

凡例

一、旧字、誤字、異体字は新字にあらためた。

一、読点を適宜入れた。

一、原文改行位置を / で示した。

一、■はヤブレによる判読不能を示す。

烏犀円 第一腎水を増精気を調 / 気魂を強し中風肝症の妙薬 価 /

壹廻り代七匁五分 / 半廻り代三匁七分五厘 / 但焼物入

抑烏犀円ハ和漢ともに官府の御製剤にて、往古ハ平人の容易服薬

にならず / 茲に 御国家博く衆を愛ミたまふ仁を体として、予が

家の烏犀円を遠郡僻 / 境の医薬に乏き小民までも弘めよとの御

免を戴きしハ誰か / 御慈愍の深きことを奉仰らざらんや、予が

大祖ハ大方脈医家にて多年烏犀円の / 治法薬方に工風を凝し、

其功能と製 法とに秘訣口授等を予が家の奕世嫡胤相伝と / ■ ■

り来りて、当代に至りて、烏犀円ハ持格 奇 効有事を沿港海浜の四

垂までも普く／弘りたる事ハ、御聞及びの通りにて平常此仙円を持
葉に懈なく服用たまハば生涯／中風の動揺も無恙して長く寿算を
全て益々豊饒ならしむ／夫人体の肝木虚すれば心火亢り氣短く魂
氣うすく万事通達なしがたく、腎水枯て男女とも／子孫を失ひ趣れ
バ百病を発し、又手足痺れ口眼過斜言絡澁大便秘結し逆上つよく／
中風のやうなる病症発り、是皆肝經の業にて筋骨を引しめ実火亢る
ゆへなり、如斯症分に此仙円を／用ゆる時は忽ち真陰の水をまし、
元陽を助くゆへに腸胃の運送よく五臓安寧にして諸虚百損を補ひ／
食をすめ精魂をまし無病壯健の基をひらくる、矢を射るよりもはや
し、○都て当世の人天質／癩症多く逆上つよく或ハ痰留飲肩脊中へせ
まり胸つく下部力なく精細うすくつかれやすく／退屈し総身力なく
時々熱出或ハ頭痛し耳なり眼かすみ等の症に平素持薬にもちひて／

即座に精分をまし、氣血順還して常人に氣力十倍なる事、第一の経路
なり○常に夢見の／事多く寝ぐるしく又ハ夢に精をもらし仮初にも
色欲の念を氣ざし、又精もれやすくして、保／なき症○面の色次第に
青く瘦おとらふる症○大便秘結し夜に入て小便ちかき症○物に／驚
き人と応対するに欠多く出退屈する症○婦人經水不順にして帯下く
だる症○さん後／調はず産勞となる症○婦人血の道一切氣骨をひら
くゆへ經水速につうじ子ならしめ出生の嬰子／壯健なり○小児
平日用ひ置時ハ疳虫急變のうれひなく、ほうさうはしか起脹をよくあ
げ快く／肥立事、此薬に双ぶ物なし○殊に一家を治め大儀を納る
人、万事思慮を費し、肝膽をくだく／よつて一際無病ならざれば万端
成就なりがたし、此神丹を晨昏服用なす時は右に示す／有ましの
病症速に断絶し心身ともに堅固にいたらしむる事、誠に掌をさ

すがごとし、其外／そのほか こうのうあまた功能多瑞なる事、中々書尽しがたし、なかくかきつく実に和漢煉薬

最大一の仙円なる事もちひて／さいだいいち せんくすりしりたまふべし、用ひやうくわしきは

りやくかうのうがき略効能書にしるす

御免 精製所 東肥 渡邊昌盈(方印) 元祖本店 肥後熊本新一丁目／
徳光屋敬右衛門(方印)

御当所御会所ニ指出シ置下候間、代錢上納以御取置可被下候